

中島
敦

夫
婦



夫

婦

今でもパラオ本島、殊ことにオギワルからガラルドへ掛け
ての島民で、ギラ・コシサンとその妻エビルの話を知ら
ない者は無い。

ガクラオ部落のギラ・コシサンは大変に大人おとなしい男だ
った。その妻のエビルはすこぶる多情で、部落の誰だれ彼かれと
いつも浮名うきなを流しては夫を悲しませていた。エビルは浮
気者だったので、（こういう時に「けれども」という接

続詞を使ったがるのは温帯人の論理に過ぎない）また、大の嫉妬家やきもちやでもあった。己おのれの浮気に夫が当然浮気をもつて酬むくいるであろうことを極度に恐れたのである。夫が路みちの真中を歩かずに左側を歩くと、その左側の家々の娘共はエビルの疑うたがひを受けた。逆に右側を歩くと、右側の家々の女達に気があるのだらうと云ってギラ・コシサンは責められるのである。村の平和と、彼自身の魂の安静とのために、哀れなギラ・コシサンは狭い路の真中を、右にも左にも目をやらずに、ただ真下の白い眩まぶしい砂だけを見詰めながら、おずおずと歩かねばならなかった。

パラオ地方では痴情にからむ女同志の喧嘩のことをヘルリスと名付ける。恋人を取られた（あるいは取られたと考えた）女が、恋敵こいがたきの所へ押しかけて行つてこれに戦を挑むのである。戦は常に衆人環視の中で堂々で行われる。何人なんびともその仲裁を試みることは許されぬ。人々は楽しい興奮をもつて見物するだけだ。この戦は単に口舌にとどまらず、腕力をもつて最後の勝敗を決する。但し、武器刃物類を用いないのが原則である。二人の黒い女が喚わめき、叫び、突き、抓つねり、泣き、倒れる。衣類が——昔は余り衣類をまとう習慣が無かったが、それだけにその

僅^{わず}かの被^ひ覆^{ふく}物^{ぶつ}は最低限の絶対必要物であつた。——搥^{むし}り破られることは言うまでもない。大抵の場合、衣類をこごとく搥り取られてついに立って歩けなくなつた方が負と判定されるようである。それまでにはもちろん双方とも抓り傷^{ひっか}引搔^ひき傷^かの三十ヶ所や五十ヶ所は負うている。結局、相手を素裸^{すはだか}にして打倒した女が凱歌^{がい}をあげ、情事における正しき者と認められ、今まで厳正中立を保つて見物していた衆人^{ゆうじん}から祝福を受ける。勝者は常に正しく、従つて神々の祐助祝福^{ゆうじゆ}を受けるものだからである。さて、ギラ・コシサンの妻エビルは、この恋喧嘩^{へルリス}を、

人妻といわず、娘といわず、女でない女を除いたあらゆる村の女に向って仕掛けた。そうしてほとんどすべての場合、相手の女を振り引掻き突飛ばしたあげく、丸裸に引剥ひきむいてしまった。エビルは腕も脚もあくまで太く、膂りよく力ひいに秀ひいでた女だったのである。エビルの多情は衆人周知の事実だったにもかかわらず、彼女の数々の情事は、結果から見ても、正しいと言われなければならない。ヘルリスにおける勝利という動かし難い輝かがやかしい証拠ろうこがあるのだから。こうした実証を伴う偏見ほど牢乎ろうこたるものはない。実際エビルは、彼女の現実の情事は常に正義で

あり、夫の想像された情事は常に不正であると固く信じ
ていた。哀れなのはギラ・コシサンである。妻の口舌と
腕力とによる日ごとの責苦の外に、かかる動かし難い証
拠を前にして、彼は、本当に妻が正しく己が不正なのか
も知れぬという良心的な懷疑にまで苦しまねばならなか
った。偶然が彼に恵まなかつたなら、彼は日々の重みの
ために押潰おしつぶされてしまったかも知れぬ。

その頃パラオの島々にはモゴルと呼ばれる制度があつ
た。男子組合ヘルデベヘルの共同家屋ア・バイに未婚の女が泊り込んで、炊事
をする傍ら娼婦のような仕事をするのである。その女は

必ず他部落から来る。自発的に来る場合もあり、敗戦の結果強制的に出させられることもある。

ギラ・コシサンの住んでいるガクラオの共同家屋ア・バイにたまたまグレパン部落の女がモゴルに来た。名をリメイと
 いて非常な美人である。

ギラ・コシサンが初めてこの女をア・バイの裏の炊事
 場で見た時、彼は茫然としてしばらく佇立ちよりつした。その女
 の黒檀彫こくたんぼりの古い神像のような美に打たれたばかりではな
 い。何か運命的な予感が——この女によってのみ自分は
 現在の女房の压制から免れられるかも知れぬという・哀

れにも甚はなはだ打算的な予感がしたのである。彼のこの予感まっげは、彼を見返した女の熱情的な凝視（リメイは大変長い睫まっげと大きな黒い目とをもっていた）によって更に裏付けられた。その日以来、ギラ・コシサンとリメイとは恋仲になったのである。

モゴルの女は一人で男子組合の会員のすべてに接する場合もあれば、ある特別の少数、あるいは一人だけに限る場合もある。それは女の自由に任せられるのであって、組合の方で強制する訳には行かない。リメイは既婚者ギラ・コシサン一人だけを選んだ。男自慢の青年共の流眄ながしめ

口説くどきも、その他の微妙な挑発的手段も、彼女の心を惹くことが出来ない。

ギラ・コシサンにとって、今や世界は一変した。女房の暗雲のような重圧にもかかわらず、外には依然陽ひが輝き青空には白雲が美しく流れ樹々には小鳥が囀さえずっていることを、彼は十年この方始めて発見したように思った。

エビルの慧眼けいがんが夫の顔色の変化を認めない訳がない。

彼女は直ちにその原因を突きとめた。一夜、徹底的に夫を糾弾きゆうだんした後、翌朝、男子組合のア・バイに向って出掛けた。夫を奪おうとした憎むべきリメイに断乎として

ヘルリスを挑むべく、海盤車ひとでに襲いかかる大蛸おおだこのような猛烈さで、彼女はア・バイの中に闖入ちんにゆうした。

ところが、海盤車と思つた相手は、意外なことに痺れ鱒しびえいであつた。一擲ひとつかみと躍りおどかかった大蛸はたちまち手足を烈しく刺されて退却せねばならなかつた。骨髓に徹する憎悪を右腕一つにこめて繰出したエビルの突きは二倍の力で撥ね返され、敵の横腹を抓ろうとする彼女の手首は造作なく振ねじ上げられた。口惜くやしさに半ば泣きながら渾身の力をもつて体当りを試みたが、巧みに体を躲かわされて前にのめり、柱にいやというほど額をぶつつけた。目が眩くら

んで倒れる所へ相手が襲いかかって、瞬く間にエビルの着物はことごとく捲り去られた。

エビルが負けた。

過去十年間無敵を誇った女おんなじょうふ 丈夫エビルが最も大事な恋喧嘩ヘルリスに惨敗を喫したのである。ア・バイの柱々に彫られた奇怪な神像の顔も事の意外に目を睜みはり、天井の闇にぶら下って惰眠だみんを貪っていた蝙蝠共こうもりもこの椿事ちんじに仰天して表へ飛び出した。ア・バイの壁の隙間から一部始終を覗いていた夫のギラ・コシサンは、半ば驚き半ば欣よろこび、大体において惶おそれ惑うた。リメイによって救われるかも

知れぬとの予感が実現しようとしているのは有難かったが、何しろ無敵のエビルが敗れるなどという大変事を前にして、一体この事柄をどう考えていいのか、また、この事件が己が身にどう影響して来るのか、大いに惶れ惑わざるを得なかったのである。

さて、エビルはかすり傷だらけの身体に一糸もまとわず、髪の毛を剃られたサムソンのごとくに悄然と、前を抑えながら家に戻った。既に習慣となっていた卑屈さのせいで、ギラ・コシサンはリメイと共にア・バイに留まって勝利の歓喜を頷つわかことはせず、意気地なくも負け

た女房のあとについてノコノコと帰って来た。

始めて敗北の惨めさを知った英雄は二日二晩口惜し泣きに泣き続けた。三日目によろやく泣声はやむと、今度は猛烈な罵声がこれに代った。口惜し涙の下に二昼夜の間沈潜していた嫉妬と憤怒ふんぬとが、今や、すさまじい咆哮ほうこうとなつて弱き夫の上に作裂したのである。

椰子やしの葉を叩くたたスコールのごとく、麵麩パンの樹に鳴く蟬せみ時雨しぐれのごとく、環礁かんしょうの外に荒れ狂う怒濤のごとく、ありとあらゆる罵詈雑言ばりぞうごんが夫の上に降り注いだ。火花のよ
うに、雷光のように、毒のある花粉のように、嶮けわしい悪

意の微粒子が家中に散乱した。貞淑な妻を裏切った不信
 な夫は奸悪かんあくな海蛇だ。海鼠なまこの腹から生れた怪物だ。腐木ふぼく
 に湧く毒茸どくきのこ。正覚坊しょうがくぼうの排泄物。黴かびの中で一番下劣な奴。
 下痢をした猿。羽の抜けた禿翡翠はげかわせみ。よそからモゴルに来
 たあの女ときたら、淫乱な牝豚だ。母を知らない家無し
 女だ。齒に毒をもったヤウス魚。凶悪おおとかげな大蜥蜴。海の底
 の吸血魔。残忍なタマカイ魚。そして、自分は、その猛
 魚に足を喰い切られた哀れな優しい牝蛸だ。……………
 余りの烈しさ騒々そうぞうしさに、夫は耳が聾ろうしたように茫然
 としていた。一時は、自分がすっかり無感覚になったよ

うな気がした。対策を考える暇などには無いのである。怒鳴り疲れた妻がちよつと息を切って椰子水に咽喉のどを潤おす段になって、やつと、今まで盛んに空中に撒まき散らされた罵言が綿カボツクの木の棘とげのようにチクチクと彼の皮膚を刺すのを感じた。

習慣は我々の王者である。このような目に会いながら、妻の絶対専制に慣れたギラ・コシサンはまだア・バイのリメイの許に逃げ出す決心がつかないでいた。彼はただ哀願してひたすらに宥ゆうじよ恕を請うばかりである。

狂乱と暴風の一昼夜の後、ようやく和解が成立した。

但し、ギラ・コシサンがキツパリとあのモゴルの女と切れた上で、自ら遙々はるばるカヤンガル島に渡り、その地の名産たるタマナ樹で豪勢な舞踏台オイラオルを作らせ、それを持帰った上で、その披露かたがた二人の夫婦固めの式を行うという条件つきである。パラオ人は珠貨ウドウドと饗宴との交換によって結婚式を済ませてから数年の中にまた改めて「夫婦固めの式」ルをすることがある。もちろんこれには多額の費用が要るので、金持だけがこれをするのだが、大して裕ゆたかでないギラ・コシサン夫婦はまだこれをしていなかった。今この上になお舞踏台までも作るといふことはなみ

なみならぬ経済上の無理を伴うものだったが、妻の機嫌を取結ぶためには何とも仕方が無かった。彼はなけなしの珠貨ウドウドを残らず携えてカヤンガル島に渡った。

恰好かつこうなタマナ材はすぐに切出されたが、舞踊台の製作には大変暇がかかった。何しろ脚が一つ出来たといつては皆を集めて一踊り祝の踊をし、表面が巧く削れたといつてはまた一踊りするるので、なかなかはかが行かない。初め細かった月がいったん円くなり、それがまた細くなるまでかかってしまった。その間カヤンガルの浜辺の小舎こやに起臥おきふししながら、ギラ・コシサンは時々懐かしいり

メイのことを心細く思い浮べた。あの恋喧嘩以来自分があの女に会いに行けない苦しさを、果してリメイは解つてくれているだろうか。

一月の後、ギラ・コシサンは莫大な珠貨ウドウドを職人達に支払い、新しい見事な舞踊台を小舟に積んでガクラオに帰った。

彼がガクラオの浜に着いた時は夜であつた。浜辺にかあかと篝火かがりびが燃え、人々の手を拍うち唱うたいはしやぐ声が聞える。村人が集まって豊年祈りの踊をしているのであろう。

ギラ・コシサンは踊の場所から大分離れた所に舟を繋ぎ、舞踊台は舟に残したまま、そつと上陸した。静かに踊の群に近付き椰子樹の陰から覗いてみたが、踊る人々の中にも見物の中にも妻のエビルの姿は見えない。彼は心重く己が家へと歩を運んだ。

ひよろ高い檳榔樹びんろうじゆ木立こたちの下の敷石路をギラ・コシサンは、忍び足で灯の無い家に近附いた。家に近附くのが、ただ何となく怖かったのである。

猫のように闇中を見通す未開人の眼で彼がそうつと家の中を窺った時、彼はそこに一組の男女の姿を見付けた。

男は誰か判らないが、女がエビルであることだけは間違いない。瞬間、ギラ・コシサンは、ほっと、助かった！ という気がした。目前に見た事の意味よりも、いきなり妻に怒鳴りつけられる事から免れたことの方が彼にとって重大だったのである。次に彼は何か少し悲しい気がした。嫉妬でも憤怒でもない。大嫉妬家のエビルに向って嫉妬するなどは到底考えられぬことだし、怒りなどという感情はいじけたこの男の中からとうに磨滅し去っていて今は少しの痕跡さえ見られない。彼はただ何かほんの少し寂しい気がしたただけである。彼はまたそつと足音を忍

ばせて家から遠ざかった。

いつかギラ・コシサンは男子組合ヘルデベヘルのア・バイの前に来ていた。中から微かに明りの洩れるのを見れば、誰かがいるに違いない。はいつて見ると、ガラんとした内に椰子殻がらの灯が一つともり、その灯に背を向けて一人の女が寝ている。紛まごう方なきリメイだ。ギラ・コシサンは胸を躍らせて近寄った。向うむきに寝ている女の肩に手を掛けて揺すぶったが、女は此方を向かない。眠っているのではない様子である。もう一度揺すると、女が向うをむいたまま言った。「私はギラ・コシサンの思い者だから、

誰も触つてはいけない！」ギラ・コシサンはとび上った。欣びに顫ふるえる声で叫んだ。「俺だ。俺だ。俺だ。ギラ・コシサンだ。」驚いて振向いたリメイの目に大粒の涙が見る見る湧いた。

大分長い間経たって二人が我に返った時、リメイは（エビルを負かすほどの強い女だったにもかかわらず）さめざめと泣きながら、彼が来なくなってからの久しい間に、いかに操みさおを立てるのが苦しかったかを、かき口説くどいた。もう二三日も立てばあるいは操を立て通しきれなかったかも知れないとも言った。

妻があれほど淫奔いんぽんで、娼婦がかくも貞淑だという事實は、卑屈なギラ・コシサンにもついに妻の暴虐に対する叛逆を思い立たせた。以前の壮烈な恋喧嘩の結果を見れば、優しく強いリメイがついている限り、幾らエビルが攻寄せめよせて来ても恐れることはない。今までこれに思い到らず、愚凶愚凶とあの猛獣の窟から逃出さなかつたとは、何という愚かなことだったか！

「逃げよう。」と彼は言った。この際にもまだ逃げるなどという臆病な言い方を彼は用いた。「逃げよう。お前の村へ。」

ちようど、モゴルの契約期間も満期になる頃だったの
で、リメイも彼を伴つての帰村を承知した。二人は篝火
のまわりに踊り狂う村人達の目を避け手を携えて間道か
ら浜に出ると、先ほど繋いでおいた独木舟に乗り、夜の
海に浮かび出た。

翌朝白々明けに舟はリメイの故郷アルモノグイに着い
た。二人はリメイの親の家に行き、そこで結婚した。ほ
ど経て、例のカヤンガル出来の舞踊台を村の衆に披露し、
かたがた盛大な夫婦固めの式を挙げたことは言うまでも
ない。

一方、エビルは、夫がまだカヤンガルで舞踊台の出来上りを待っているとのみ思って、日夜数人の未婚の青年を集めて痴情に耽っていた。しかしある日のこと、アルモノグイ近辺から来た椰子蜜採りの口から、ついには、事の真相を聞きつけた。

エビルはたちまちカーツと逆上した。世の中に自分ほど可哀そうな者は無い、オボカヅ女神の身体がパラオの島々と化して以来、リメイほどしょう性の悪い女は無い、と喚き、ワアワア泣きながら家を飛び出した。海岸のアーバイの所まで来ると、その前の大椰子樹に手を掛けて

上ろうとした。昔、大變古い昔、この村のある男が財宝と芋田うでんと女とを友人に欺あざむきとられた時、その男はこの椰子の親木（今からずっと前に枯れてしまったが、その頃はまだ椰子としての男盛りで村一番の丈高たけい樹であった）に駈てつけ上り、その天辺てつから村中の人々に呼び掛けて、己の欺かれた次第を告げ、欺瞞ぎまん者を呪い世を怨み神を怨み己を生んだ母親をも怨んで、それから、地上へ飛び下りた。これが言伝えに残る・前にも後にもこの島ただ一人の自殺者だが、今エビルはこの男に倣ならおうとした。しかし、男になら訳なく登れる椰子の樹も、女にはなかなか

かむずかしい。殊にエビルは肥って腹が出ているので、登り易くするためには椰子の幹に刻んだ切痕を五段も攀よじ上ると、早くも呼吸が切れて来た。もうこれ以上はどうしても登れそうもない。口惜しさにエビルは大声を出して村人を呼んだ。そうして、その高みから（それでも地上二間位けんは登っていたろう）ずり落ちまいと必死に幹にしがみつきながら、己の憐れな境遇を訴えた。海蛇の名に誓い椰子蟹と小判鮫こばんざめの名にかけて、夫とその情婦とを呪った。呪いながら、涙にかきくれた目で下を見ると、村全体が集まっているに違いないと思った期待がすつか

り外れた。下にはわずか五六人の男女が口をあけて彼女の狂態を見上げているだけだ。誰ももうエビルの叫喚きょうかんには慣れてしまつて、また始まつたと昼寝の枕から首も上げないのであろう。

とにかく、相手がわずか五六人では、何もこんなに喚くがものはない。それに、さつきから彪ぼう大な身体がともすれば滑り落ちそうで仕方が無い。エビルは今までの叫喚をピタリと止め、多少きまり悪げな笑いを浮べてノソノソ下りて来た。

下にいた数人の村人の中に、エビルがギラ・コシサン

の妻になる以前に大變懇^{ねんご}ろであつた一人の中年男がいた。悪い病のために鼻が半分落ちかかっていたが、大變広い芋田を持った・村で二番目の物持である。下りて来たエビルはこの男の顔を見ると、自分でも訳が分らずにニコリとした。途端に、男の視線が熱いものとなり、たちまち意気投合したのである。二人は手を取り合つて、鬱蒼^{うつそう}たるタマナ樹の茂みの下に歩み去つた。

残された少数の見物人も別に驚きはせぬ。二人の後姿を見送つてニヤリと笑つたばかりである。

四五日すると、エビルと共に白昼タマナの茂みに姿を

消した中年男の家に、エビルが公然と入り込んだことを村人は知った。鼻の半分落ちかかった・村で二番目の物持は、ちようど、最近妻に死なれたばかりだったということである。

かくてギラ・コシサンとその妻のエビルとは二人とも、但しめいめい別々にではあるが、幸福な後半生を送ったと、今に至るまで村人達は語り伝えている。

×

×

×

話は以上で終るのだが、ここに出て来るモゴルすなわち未婚女の男性への奉仕という習慣は、^{ドイツ}独逸領時代に入ると共に禁絶されてしまい、現在のパラオ諸島にはその跡を留めていない。しかし、村々の老婆に尋ねてみると、彼女等はいずれも若い頃その経験をもったとのことである。嫁入前には誰しも必ず一度は他村へモゴルに行つたものだという。

さて、今一つのヘルリスすなわち恋喧嘩に至っては今なお到る所で盛んに行われている。人間の在る所恋あり、

恋ある所嫉妬ありで、蓋しけだこれは当然であろう。現に筆者もかの地に滞在中したしくこれを目撃したことがある。事の次第もその烈しさも本文中に述べた通りで（私を見たのもやはり言いがかりを付けて来た方が返り討ちに会ってワアワア手離しで泣きながら帰って行ったが）昔と少しも変る所が無い。ただ違うのは、これを取巻いて囃し応援し批評する観衆の中に、ハモニカを持った二人の現代風な青年の交っていたことである。二人とも、最近コロールの町に出て購もとめたに違ちがいない・揃そろいの・真青な新しいワイシャツを着込み、縮れた髪に香油をべっ

とりと塗り付けて、足こそ^{はだし}跣足ながら、なかなかハイカラそうないでたちである。彼等は、活劇の伴奏のつもりなのであろうか、いかにも気取ったポーズで首を振り足踏をしながら、この烈しい執拗な闘争の間じゅう、ずっと軽快なマーチを吹き続けていた。

(昭和十七年十一月)

日本文学電子図書館

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行



日本文学電子図書館